

## 山東竜山文化の城牆に関する一試論

小 川 誠

### A Study Concerning City Wall of Shantung Lung-shan Culture

Makoto OGAWA

#### I. 問題意識の整理

中国文化を特質づける構築物のひとつに城牆<sup>(1)</sup>がある。城牆に関しては、考古学の立場に限ってみても、地域や時代を超えて様々な角度から研究がなされてきた。とりわけ、城牆の発生と初期発展過程にかかわる問題は、研究テーマとして取りあげられる機会が多い。これは、城牆が、王朝や国家の出現と直接結びつくばかりでなく、全中国規模で圜牆が発見されるようになってきたという昨今の情勢にも負っている。

いま、新石器時代もしくはそれ相応の時代に属するとされる圜牆の分布状況を観察するならば、それらが、北方、黄河流域、長江流域に分かれて点在し、かつそれらのなかで、いくつかのグループを形成している様子を見てとることができる。たとえば、北方地域では内蒙古中南部地区と遼西地区、黄河流域では中流域と下流域の両区への細分が可能であろう<sup>(2)</sup>。しかしここでは、このような分布の実態が、初期段階の圜牆に対する認識の変化をうながす格好の素材となっていることを強調しておきたい。数年前まで、新石器時代の圜牆は特異な存在として受け止められることが多かった。それがいまや、特定の地域に限ってあらわれる、そのような類の遺構ではなくなったことをこの分布状況は示している。初期段階の圜牆の発見は、まさに、個別的、特殊な現象から全体的、普遍的な現象へ脱皮したということができる。もちろん、すべての新石器時代の居住遺跡で圜牆が確認されているわけではない。あくまでも、過去との相対的な問題として述べているのである。

このような現状をふまえたうえで、次に、圜牆研究のとるべき方向性といったものを少し探してみたい<sup>(3)</sup>。従来、圜牆を研究するに際しては、個別の視点を導入するケースがほとんどであったように思う。個別の視点とは、城牆を一件の単位（独立体）としてあつかうことを意味する。たとえ複数の城牆を研究対象にしたとしても、それらはあくまでも、個々独立した城牆の単なる寄せ集めにすぎず、後述するような、連関の立場が介在する余地はそこにみだせない。これは圜牆の発見例がごく限られていたことにもつばら起因するが、一方で、各圜牆の詳細な報告が得られないことも、このような趨勢をつくりあげてきた一因となっている。

この、個別の視点をとった場合、差異性への着目がひとつの分析手段として浮かびあがってくる<sup>(4)</sup>。差異性への着目とは、要するに、目にみえる部分での差異に力点をおくことにより、圜牆の地域差（個体差）をあきらかにさせようとする手法である。そこには、素材の違い、かたちの違い、大きさの違い、築造法の違い、内部構造の違いなどの様々な着目点が想定されうる。たとえば、素材の違いを例にとるならば、石材を使用した圜牆は北方地区に特有な事例であり、また、一般に方形を常とするなかでの円形圜牆の存在は、長江中流域の特異性をきわだたせている。このようにして各地の圜牆の特徴を整理し、文化様相の格差に論及していくことが当方法論のめざすところとなる。この事実在即した分析法は、考古学者にとっての常道であり、オーソドックスな手法として必要欠くべからざるものであるが、他方、方法論として比較考察の域をでるものではないことにも留意されねばならない。

さて、個別の視点をとった場合に派生してくるもうひとつの着目点として、意味（解釈論）や意識（観念論）の問題がある。これは、①各地各様の圜牆はそれぞれどのような性格をもっていたのか、地域や形態の違いにより圜牆に託された意味は異なっていたのか、あるいは、②地域差、形態差を超えた世界で、城牆に

共通する意識はあったのか、さらに、ヒトはなぜ城牆をつくったのか、というような論題である。前者(①)に関しては、宮本一夫氏が北方と長江流域を例にとって、それぞれの地域における囲牆出現の背景の違いを論じている<sup>(6)</sup>。また、中村慎一氏は、囲牆集落の機能として、内蒙古東部の囲牆群に代表される城塞的なものと、山東、湖北、四川の諸例にうかがえる都市的なものを両極に据え、河南の例をそれらの中間的な存在として想定している<sup>(6)</sup>。詳細を紹介する余裕はないが、これらは、地域差を念頭においた囲牆の解釈論にまで踏み込もうとする試みとして注目される。いまのところ前者の代表例になるのかもしれない<sup>(7)</sup>。一方、後者(②)に関しては、観念論の世界に入ることを要求されるため、考古学の立場からは論考がほとんどなされていないのが現状である。ここでも、この問題については、考古学の領域を離れない範囲で、私見を簡単に紹介するにとどめておく。

まず、各城牆に共通した意識という観点から論を展開するにあたっては、それがきわめて観念レベルでの問題になることを周知しておかねばならない。第一に物質としての城牆が存在し(事実)、第二に城牆およびそれらを取り巻く諸条件の差が析出され(分析)、第三に各地の城牆に付された意味の違い(解釈)が引きだされるとするならば、この問題は、それらを超えた第四の規準に相応するものとなる。これらの四つの規準は、事実—分析—解釈—観念という順で階層構造をなしていると考えられるが、この第四段階で我々がいうのは以下のことに限られよう。それは、囲牆が囲む行為の物質的体现であったとするならば、最低限そこには区画(分画)の思想が介在していた、というひとことである<sup>(8)</sup>。それは、自と他を分ける行為であったといかえることもできる。しかしこの思考のレベルでは、そのなかに環濠も含まれてしまう。区画するという一点では、囲牆も環濠も同じものとみなしうるからである。となると、環濠にはなく囲牆にのみ特有な属性はどこに求めたらよいのであろうか。それは、地上より突出させた物体によって区画する、この行為のなかにこそ求められる<sup>(9)</sup>。つまり、生活のレベル(地面)に立ったとき目を遮るものが存在したということである。これは囲牆と環濠の決定的な違いとなっている。すなわち、地域や形態の差を超えて、少なくとも視線を遮断するような物体によって集落の周囲を取り囲んでいることが囲牆存立の第一の条件となり、また、遮蔽物による区画の思想こそが、人間の意識レベルにおける観念論の出発点ともなってくるのである<sup>(10)</sup>。

以上が、個別の観点をとったときにあらわれてくる問題群である。これらを逐次整理することによって、城牆をめぐる論題の多くは解決されることになろう。ただし、これのみでは不十分である。個別の観点では、社会構造全体の解明に不足が生じてくるきらいがある。すなわち、このような区画(分画)の思想を原点とし、その土地に特有の囲牆をつくるようになった社会はどのようなものであったのか、と問うたとき、個別の見方だけでは満足のいく解答が与えられない。なぜならば、社会は「関係」の網の目で成り立っているから。よってここにいたり、囲牆を集合の視点、連関の視点からとりあげる必要性が生じてくる。これは、囲牆を個々の独立した構築物とみなすというよりも、近隣の諸囲牆、諸遺跡を含み込んだひとつの有機的なネットワーク体としてとらえていくことを意味している。つまり、囲牆集落どうし、あるいは囲牆集落と囲牆をもたない集落との関連性(結びつき)を探ることによって、当時の社会構造にまで足を踏み入れようとするものである。それはまた、城牆という切り口から、文明成立前夜としての新石器時代晩期社会を照射することにもつながっていく。したがって、初期段階の囲牆を考察の対象とする際には、とりわけ大切な視点となってくる<sup>(11)</sup>。

だが、残念なことに、このような道は資料的な制約のゆえにはばまれてきた。全中国規模で囲牆が発見されている今日においてさえも、それを論じるだけの十分な材料が整っているとはいえない。しかし、反面、囲牆の発見例が増加の一途をたどっている今の時点で、連関の視点をとるまでにはおおよぼとも、複数の囲牆を限られた地域に築造する、そのような状況を整理してみるのも有意義なことではなかろうか。たとえば、遼寧や山東では囲牆群と呼べるようなかたちで発見例が報告されている。このような素材をもとに、囲牆をつくらしめた社会の様相、あるいは、囲牆がどのような社会状況のなかから誕生してきたのかを追求するための基礎作業を行なうことは、あながち的外れな試みとはいえない。現時点で適切な解は得られなくても、今後の方向性をみいだすことは少なくともできるであろう。資料は、昨今話題を呼びつつある山東の囲牆群

を使用する。これらを整理し、そこに関連の視点が導入されうるかどうか探りを入れることに、本論の目的なり意義なりをおいてみたいのである。

## II. 山東における初期段階の城牆

山東における初期段階（新石器時代晩期）の城牆を、竜山期の諸例を中心にしてまとめると表1のようになる。最近、聊城地区で囲牆群が発見されたこともあって、その数は20件ほどを数えている。まずは、これらの囲牆群を整理することからはじめてみたい。なお、表1、17～20の西呉寺、呂家莊古城、丹土は情報量が少ないため省略してある。

表1 山東竜山文化の城牆一覧

	遺跡名	所在	備 考	文献
1	景陽崗	陽谷	聊城地区囲牆群。面積38万㎡。	1～6
2	王 莊	陽谷	聊城地区囲牆群。面積4万㎡。	1, 2, 4, 5
3	皇姑冢	陽谷	聊城地区囲牆群。面積6万㎡。	1, 2, 4, 5
4	王 集	東阿	聊城地区囲牆群。面積3.8万㎡。	1, 2, 4, 5
5	孟嘗君	東阿	聊城地区囲牆群。囲牆の存在が推定されている。	1, 4
6	教場鋪	茌平	聊城地区囲牆群。面積33万㎡。	1, 2, 4, 5
7	大 尉	茌平	聊城地区囲牆群。面積3万㎡。	1, 2, 4, 5
8	樂平鋪	茌平	聊城地区囲牆群。面積3.4万㎡。	1, 2, 4, 5
9	尚 莊	茌平	聊城地区囲牆群。面積4万㎡弱。	1, 2, 4, 5
10	台子高	茌平	聊城地区囲牆群。囲牆の存在が推定されている。	1, 4
11	城子崖	章丘	面積20万㎡（竜山期の囲牆）。	7～11
12	丁 公	鄒平	面積11万㎡。外側に濠溝あり。	11～14
13	田 旺	臨淄	面積15万㎡（竜山期の囲牆）。	11, 15
14	史 家	桓台	残壁確認。	16
15	辺線王	寿光	内城面積1万㎡、外城面積5.7万㎡。	11, 17, 18
16	薛故城	滕州	面積2.5万㎡。	19
17	西呉寺	兗州	囲牆の可能性。	5
18	呂家莊	蒙陰	囲牆の可能性。	5
19	古 城	費県	囲牆の可能性。	5
20	丹 土	五蓮	面積25万㎡。	5, 20

（文献は論文末尾に掲載）

1. 聊城地区圉牆群<sup>(12)</sup>

当圉牆群は、茌平、東阿、陽谷の三県にまたがって所在する。いまのところ、確認された圉牆は8件を数える。内訳は、陽谷で3件（景陽崗、王莊、皇姑冢）、東阿で1件（王集）、茌平で4件（教場鋪、大尉、樂平鋪、尚莊）となっている。ただし、未発見ながら圉牆の存在が推定される東阿孟嘗君と茌平台子高の二遺跡を加えると、総計10件ということになる<sup>(13)</sup>。これらはおよそ直径数10kmの円内の範囲におさまっている。そして、南北の両組に分かれるという。

南組は陽谷の景陽崗、王莊、皇姑冢の三圉牆により構成される。景陽崗の圉牆は、東北から西南方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈していた<sup>(14)</sup>（図1）。大きさは、長さ約1150m、東北端幅約230m、西南端幅約330m、最も幅広の部分で約400mをはかる。また、頂部幅10.5～12.5m、下部幅19～20.5m、残高2～3mという、壁体に関する計測値も一部公表されている。壁の断面からは、数多くの夯層が重なって観察され、欠口（城門部と推定されている）は、南、西、北の三個所で認められた。なお、内外濠の有無はあきらかでない。

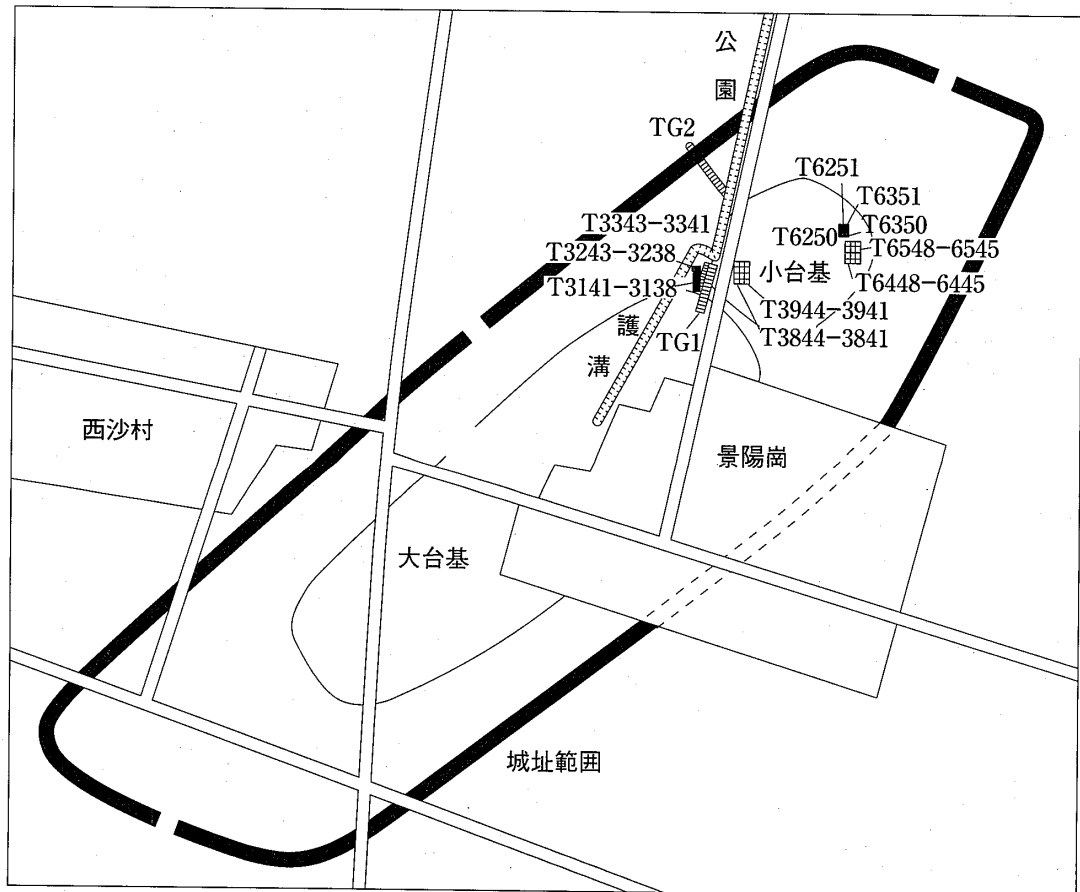


図1 景陽崗竜山文化城牆平面図 0 300 m

城牆の建造と使用年代は、基本的に山東竜山文化の時期に属しており、それは、尹家城Ⅳ～Ⅵ段に相当する。ただし、文化類型は、城子崖、尹家城、後崗、いずれの周辺地方諸類型とも異なるものであり、報告者はこれを新類型と認識している<sup>(15)</sup>。

城内からは大小二つの台基（台状の基壇）が発見された（図1）。大きな台基は隅丸長方形をなし、長軸の方向は圜牆のそれと一致する。南北約520m、両端幅約175m、最広部の幅200m程度、現存高度は約2～2.5mと報じられる。南北約520mということは、（圜牆自体の長さが約1150mであるから）距離にして城内のおよそ半分を占拠していたことになる。一方、小さな台基は大きな台基の東北15mのところ隣接して位置し、これは、隅丸の方形に近い形状を呈している。また、大小台基のあいだでは、早晩の四組に分かれる夯土堆積層が確認された。この夯築遺構の性格についてはまだあきらかになっていない。

これらの報告を要するに、景陽崗の圜牆は隅丸長方形を呈し、内部に大小二つの基壇が残存していたということになる。

さて、残りの二城のうち、王莊の圜牆は景陽崗の東北10kmの地点に、皇姑冢の圜牆は景陽崗の西南8kmの地点に築造された。前者の形状は、東北から西南方向に向いた隅丸扁長方形であり、長さ約360m、幅約120mとなっている。大汶口から竜山期にかけて継続して使用された、規模の小さな圜牆であつたらしい。一方、後者も隅丸長方形を呈していたが、王莊のそれよりもやや大きくつくられ、長さ約495m、幅約150mと報告される。長軸はやはり景陽崗の圜牆と同方向（東北から西南）を向いていた。これらの城牆は、景陽崗のそれと比べるとはるかに小型である。

北組の圜牆群に目を転じてみたい。北組は五つの圜牆により構成される。それらは、行政区画上、荏平の4件（教場鋪、大尉、樂平鋪、尚莊）と東阿の1件（王集）に分かれるが、実際は、教場鋪、大尉、樂平鋪、王集の四圜牆がおよそ10kmの圏内に集まり、その北側に尚莊が離れて点在するといった布置を示す。いま、教場鋪からの距離をはかると、樂平鋪は北北東6km、大尉は北東3km、王集は南東4km、尚莊は北側19kmのところ所在していた。よって、北組のなかでもさらに、南側と北側のグループに分割することが可能である<sup>(16)</sup>。

なかでは、教場鋪が最も大きく、東西約1100m、南北約300mの長方形を呈する。東壁の幅は約30mあり、西側が竜山期、東側が「夏商時期」の夯築部になっている。ということは、「夏商時期」になって、壁の厚みを増すべく、竜山期に築かれた壁の外側にあらたに壁部を付け加えたことになる。城内では、東西二つの台基が確認された。東台は東西約100m、南北約160m、西台は東西約880m、両台基の間隔は70mとされる。西台の東西約880mという測定値は、圜牆の東西幅の四分の三以上を占める数値である。景陽崗の圜牆とくらべると、大小の台基がほぼ西東に並ぶところでは共通するが、圜牆全体のなかで台基（西台）の占める割合は教場鋪の方が大きかったことが想定される。

教場鋪の周辺に集まる三城と尚莊の圜牆に関しては不明な部分が多い。計測値がわかるのは樂平鋪と王集のみであり、前者は東西約200m、南北約170mの隅丸方形、後者は東西約120m、南北約320mの隅丸長方形となっている。

## 2. 城子崖（章丘）<sup>(17)</sup>

当遺跡は、新中国成立以前の1928年に発見され、発掘は直後の1930年と31年に行なわれた。その後、60年近くたった1990年と91年に再度試掘が試みられ、あらたな事実があきらかとなっている<sup>(18)</sup>。そのなかで最大の収穫は、城牆の築造年代に関して決着がついたことであろう。当圜牆は発掘当初、新石器時代（黒陶文化）のものとして報告されたが、帰属時期をめぐってはそれを東周時期のものとするなど幾度かの論争を経過して今日に至っていた<sup>(19)</sup>。それが、当時の報告で黒陶文化の時代とみなされていた、その圜牆が、実は岳石文化期のものであったことが判明したのである<sup>(20)</sup>。

新事実によるならば、城子崖の城牆は三時期にわたってつくられたことが確認されている。まずは竜山期の圜牆である。この圜牆は最も早い段階に属する。大きさは、東西約430m、南北の最大幅約530mをはかり、

北壁は外方向へ湾曲しているが、全体ではほぼ正方形をなしている。囲牆自体は地下に没しており、残存城壁の幅は8~13mとされる。築造にあたっては、基礎部を掘り込みそのうえに壁部をたてる方法をとっていた。また、夯打の際には、石塊を使用する場合と棍棒を使用する場合と二通りの方法があったようで、これらは早晩の時代差に対応している。

次にくるのは岳石文化の囲牆である。当期の城壁は竜山期の囲牆の平面プランとほぼ合致する。すなわち、竜山期の囲牆の上につくられていたらしい。しかし、面積はやや狭く、竜山期の囲牆が20万㎡であったのに対して、岳石期のそれは17万㎡である。旧報告では、囲牆の大きさが、南北450m、東西390mの正方形とされたが、これは計算上、新報告の17万㎡という城内のひろさとおおむね符合する<sup>(21)</sup>。築造にあたっては版築の技法がとられ、夯打の際には束ねた棍棒が使われていた。

最後は周代の囲牆となる。これは岳石期の囲牆の内側あるいはそれに重ねてつくられていたらしいが、詳細はわからない<sup>(22)</sup>。竜山、岳石、周代を通じて、時代が降るほど囲牆の大きさがわずかずつではあるが小さくなっていった現象には注目しておきたい。

### 3. 丁公 (鄒平) <sup>(23)</sup>

丁公は従前より知られた遺跡であるが、囲牆の存在があきらかになったのはごく最近のことである<sup>(24)</sup>。当遺跡は、大汶口、竜山、岳石、各時期の堆積を有する。囲牆はそのうちの竜山期に属しており、隅丸方形のプランをなす。大きさは、東西約310m、南北約350mをはかり、壁部の幅は約20m、現存高度は1.5~2mとなっている。さらに、城牆の周囲には幅20m余、深さ3mを超える濠がめぐらされていた。丁公の囲牆は濠を有する点に特徴がみいだせる。

### 4. 田旺 (臨淄) <sup>(25)</sup>

田旺に関する資料はほとんど公開されていない。竜山期の囲牆は平面が隅丸の長方形で面積は約15万㎡であったこと、そのうえに岳石ならびに周代の城牆が重なっていること、岳石期の囲牆は面積17万㎡とされること、以上の事実がわかるのみである。ただ、城子崖と異なり、竜山期から岳石期にかけて囲牆がわずかに拡張されていることを注意点としてあげておく。

### 5. 史家 (桓台) <sup>(26)</sup>

当遺跡の城牆は壁体がすでに破壊されており、基槽(土台部分)と濠のみが残されている。報告によると、基槽の残高は1.1m、長さ6m、幅0.64~0.9m、となっており、濠は、幅8~10m、長さ160mにわたって検出された模様である。この城牆は、竜山、岳石、さらに殷代にわたって修築されながら継続使用されていた。

### 6. 辺線王 (寿光) <sup>(27)</sup>

辺線王では竜山中期と晩期の堆積が確認されている。囲牆は地下の基礎部分(基槽)のみが残されており、地上部は残存していない。また、城牆は二重に築かれていたらしく、それらは、竜山中期後半と竜山晩期前半の時代差に対応する。1984年の最初の発掘では、当囲牆を、北壁が短く南壁が長い隅丸の梯形であり、東壁175m、西壁220m、中部幅225mをはかる、と報告しているが<sup>(28)</sup>、これはおそらく外側の囲牆のことをいったものであろう。一方、内側の囲牆は不規則の方形を呈していた。内外両囲牆の面積を比較すると、前者は1万㎡、後者は5万7000㎡となっている。なお、二重の城壁が両立した時期を有していたか否かはあきらかでない。

### 7. 薛故城 (滕州) <sup>(29)</sup>

当遺跡では、西周、春秋戦国時期の薛国の故城の下から竜山期の囲牆が発見された。故城全体の構造は複雑である。段階に分けて説明してみたい。まず、①戦国時期の大規模な方形城壁(東西5km、南北3.5km)が

存在する(薛国故城)。②その内側の東南隅に、東西最大長913m、南北最大長700mの中型の城壁が発見された。東壁と南壁はそれぞれ故城の東壁南部と南壁東部に重なる。これは、殷代晩期もしくは西周初期に建造されたものであり、修復を繰り返しながら戦国期まで使用されている。そしてさらに、③中型の城壁の内側から、東西170m、南北150mの小型の城壁が確認された。これも殷代晩期から戦国期にわたって使われている。ということは、②と③の囲牆は同時期に併存していたことになる。なお、報告者は小型の城壁を「宮城」としてとらえている。①～③に加えて、④小型の城壁の東側に100m四方の囲牆がみいだされたが、これに関しては不明な点が多い。⑤問題の竜山期の囲牆は、③の小型城壁の下から検出されたものである。形状、面積は小型の城壁と相似している、つまり、③の城壁は竜山期の囲牆を利用して建造されたらしい。当囲牆は、城内高く城外低くつくられる、いわゆる「台城」に属し、壁部には直径約2.5cmの夯打痕が残されていた。⑤の囲牆は、泰山山系の南側ではじめて発見された竜山期の囲牆であり、今後の詳報が待たれる。

### III. 今後の展望

以上、山東の囲牆を、竜山期の諸例を中心に紹介してきた。観察結果からもあきらかなように、初期段階の囲牆には形態面で種々のバリエーションがうかがえる(隅丸長方形、隅丸正方形、隅丸梯形、等)。面積も大は38万㎡から小は1万㎡まで様々である。一方、分布状況を見るならば、囲牆の多くは泰山山系の北側に位置している。所属(市)県を東側からたどってみると、寿光、桓台、臨淄、鄒平、章丘、茌平、東阿、陽谷となる。山東の初期段階の囲牆は、ほぼ、東経116度から120度、北緯36度から37度の範囲に築かれていた。これらは約300kmの長さでベルト地帯を形成していたことになる<sup>(30)</sup>。

このような大勢を踏まえたうえで、今後の展望として注目したいのが聊城地区の囲牆群である。まず、囲牆群にかかわる事実として、次の二点を指摘しておきたい。ひとつは、近距離に複数の城牆が築かれていたという事実である。報告者にしたが、これらを南組と北組に分けて観察すると、南組の場合、王荘、景陽崗、皇姑冢の三つの囲牆が、東北から西南に向けて点々と、それぞれ、10kmと8kmの距離を保って存在していた。半径9kmの円内に三つの囲牆が散在していたことになる。また、北組の場合、それをさらに南北のグループに分断すると、南側グループでは、楽平鋪、大尉、教場鋪、王集の四つの囲牆が、半径ほぼ5kmの円内で林立している状況をもてとることができる。これにくらべて、北側グループの尚荘はやや離れてつくられているが、それでも、南側グループの最北に位置する楽平鋪から13km強の距離を隔てるのみである。北組をひとつのまとまりとみるならば、尚荘を含めて、半径12kmほどの円内の範囲に5件の囲牆がおさまることになる。聊城地区は囲牆の多産地帯であった。

二つめは、これらの城牆に規模の別がうかがわれるという事実である。南組では、景陽崗が城内面積38万㎡と飛びぬけて大きく、王荘と皇姑冢は、それぞれ、4万㎡と6万㎡をはかるにすぎない。もう少しわかりやすく大きさを比較してみると、景陽崗は一辺約616mの正方形に、王荘と皇姑冢は、それぞれ、一辺約200mと245mの正方形に換算することができる。北組では、教場鋪が城内面積33万㎡と最大の大きさを示す。ほかの囲牆は、楽平鋪3万4000㎡、大尉3万㎡、王集3万8000㎡、尚荘4万㎡弱となっており、3万から4万㎡の範囲を超えることがない。先ほどと同じく正方形に換算すると、教場鋪が一辺約574mの正方形であるのに対して、他は一辺200m以下の正方形ということになる。

ここで、ひとつの想定をもち込んでみたい。それは、囲牆の大小がそのまま当該地域の中心的な集落と周縁的(非中心的)な集落をあらわすとする見方である。半径10km前後の狭い範囲につくられた複数の囲牆集落のあいだに何らかのかたちで連関性が存在したことは、土器などの出土遺物を検討することによって容易に証明することができる。問題は囲牆の大小をそのまま集落の格式の違い(主従の関係)とみなしてよいか、すなわち、そのような集落の格の違いが当該期にすでに存在していたと考えてよいか、というところにある。ここでは、絶対的な大きさのほかに、景陽崗、教場鋪の両囲牆の城内に同時期の大型基壇が存在したことを根拠として付加し、これらを各グループのなかの中心的な囲牆であったとみなしたい。基壇の用途は試掘段

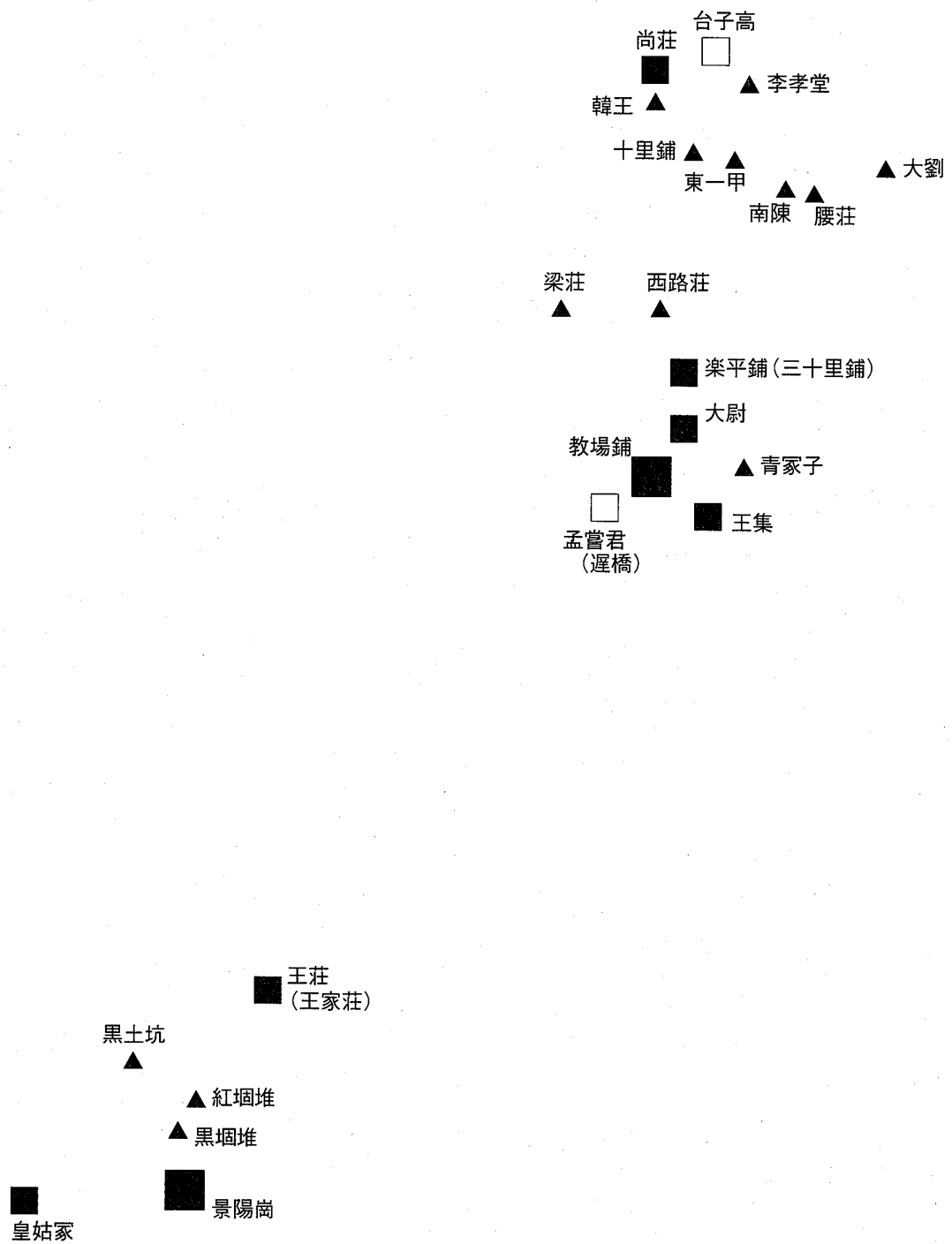


图2 聊城地区崂山期集落群分布略图



階であるために不明であるが、他を凌駕する大きさの城牆のなかに大型基壇が築かれていたということは、そこに差異性が存在したことを証明するのに十分であろう。そして、その差異性をもって、かりにそれらを各組の中心的存在としてとらえてみたいのである。

とすると、これらの囲牆群に対して、あらためてひとつの見方が提示できる<sup>(31)</sup>。まず、南組の囲牆群では、景陽崗を中心に王莊、皇姑冢の囲牆が両翼に付置されるという集落間の構図が浮かびあがってくる(図2)。王莊は景陽崗の東北10km、皇姑冢は同西南8kmのところであって、景陽崗を挟むようにして点在している。両囲牆が景陽崗の両翼に布置された格好といってもよい。これに、囲牆をともなわない周辺の竜山期の集落を加えてみると<sup>(32)</sup>、黒土坑、紅垆堆、黒垆堆といった遺跡が景陽崗の北側にまとまって配置される。ちょうど、王莊、景陽崗、皇姑冢の三囲牆がそれらの集落を抱くような格好を呈している。これらは、ひとつの集落群を形成していたとみなしてよいであろう。

次に、北組の囲牆群に目を移してみたい。そこでは、教場鋪が中心的存在となっており、それを中心に見立てると、樂平鋪は北北東6km、大尉は北東3km、王集は南東4kmに位置づけられる。また、囲牆の存在が推定されている孟嘗君は、教場鋪の西南3kmと報告される。これら、北組のなかの南側グループでは、教場鋪を中心に囲牆が取り巻くように点在していた(図2)。先ほどと同様、囲牆をもたない集落をこれに合わせるならば、梁莊、西路莊が囲牆群の北側に、青冢子が東側にくる。南側グループでは、囲牆群の周囲に集落が散在する構成をとっていた。これは、南組とは異なる布置構成である。

北組のなかの北側グループに関しては、それを独立した囲牆群とみるか否か、現在では判断ができかねる。尚莊の囲牆は面積4万㎡弱と小さく、景陽崗や教場鋪と並ぶ大型囲牆とはいえない、その意味では教場鋪を中心とする南側グループに属するのであるが、一方で尚莊は教場鋪の北19kmと離れており、そのあいだにはわずかではあるが遺跡の空白地帯も存在する。教場鋪の北東21kmのところにある台子高は囲牆の存在が推定されており、尚莊と近い位置関係にある。これらの二城が、韓王、李孝堂、十里鋪、東一甲、南陳、腰莊、大劉、といった囲牆をもたない諸遺跡と別のグループを形成していたとみることも可能であろう。

以上、大型基壇を城内にもつ景陽崗と教場鋪を中心的存在とみなして、当時の集落の位置関係を分析してみた。結果、聊城地区には、景陽崗を核とする景陽崗集落群と教場鋪を核とする教場鋪集落群の二つが存在することをあきらかにしえた。これらはおよそ50kmの距離を隔てて存在している。そしてそのあいだは、少なくとも囲牆をともなう遺跡は発見されておらず、そこは空白に近い状態を呈していた。この50kmという数値が、当時の大型囲牆間の平均的な距離をあらわしたものでかわからないが、ここでは、集落群間の距離のひとつの例として、50kmという数値を提起しておきたい。次に注目すべきは、景陽崗集落群と教場鋪集落群で集落構成に違いがみられた事実である。前者では、三城が他の集落を挟むような構成をとっていたのに対して、後者では、逆に、四城(もしくは五城)の周囲に遺跡が点在するかたちで存在した。またさらに、尚莊を中心とした一連の集落群を教場鋪集落群のサブグループとみなすならば、教場鋪集落群は北側に小グループをもつ二段構成の大集落群であったということになる。いずれにしろ、景陽崗、教場鋪、二つの集落群のあいだには、集落構成、集落規模の面で大きな違いが存在していた。このように、聊城地区の遺跡群をみるかぎり、当地の集落構成に定型的なパターンは存在していなかった。これは、立地そのほか様々な条件に左右された結果であろう。

現在公表されている資料を駆使して聊城地区の囲牆をともなう集落群を整理すると上記のようになる。ここにはまだ連関の視点が入り込む余地は少なく、したがって、当時の社会の様相を追求するところまでいたっていない。しかしその第一歩は踏みだせたのではないかと考えている。今後のとるべき方向としては、土器の検討があろう。このように整理された聊城地区の囲牆群で出土する土器を調べることによって、集落間のかかわり、もしくは、周辺地域との関連性を追求することが是非とも必要とされる。これについては、また、別の機会を得て論じてみたい。

## 註

(1)本稿で使用する「城牆」「圉牆」は、規模、形態を問わず単に集落を囲む壁を意味しており、「城堡」「城市」のような集落自体の存立様態を規定する呼称とは性質を異にする。なお、「城牆」と「圉牆」はことわりがない限り同義で使われている。

(2)ちなみに、中村慎一氏は、圉牆集落の分布を、①内蒙古自治区東部～遼寧省西部、②内蒙古自治区中南部、③山東省、④河南省、⑤湖北省南部～湖南省北部、⑥四川省中部の6地域に分けて考えている(中村慎一「中国における圉牆集落の出現」『考古学研究』第44巻第2号、1997、参照)。

(3)具体的な方法論を検討する前に基本的な考え方を述べておきたい。

圉牆をめぐる様々な視点が存在しうる。そしてそのなかには、きわめて観念的、精神的なアプローチも含まれている。だが、考古学はあくまでも物質的な観点に立脚する学問である。すなわち、考古学の原点は遺物や遺構などの「もの」に在る。これが大前提となる。それならば、圉牆をとりあげるに際して即物的な方法に徹すればよいかというと、それも一概にはいえない。確かに、即物的な方法を基本としながら、考古学も人間の学である以上、「もの」の背後に隠れた精神(観念)世界にまで考えを及ぼすことは必要であると思われるからである。不即不離の関係にある物質と精神、そのうちの前者に焦点をあてながらも常に後者を見失わない姿勢が要求されることになる。別の角度からいうならば、実証性の失われぬ範囲で意味論や観念論の世界にまで足を踏み込める、そのような方法が採択されるべきであろう。

本論は以上のような考えを基本に据えるものである。

(4)もちろんそれ以前に、特定の遺構に対する観察が必要不可欠の基礎的な作業となることはいうまでもない。測量結果はいうにおよばず、築造法や構造(つくり)といった様々な角度から当時の圉牆を客観的に分析復元しようとする試みは、研究の糸口として是非とも必要とされる。原始的ではあるが、これはきわめて考古学的方法であり、どのような観点からであれ圉牆を研究するにあたっての出発点となる。

(5)宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会会報』第三号、1993。

(6)註2、中村慎一論文に同じ。

(7)渡辺芳郎氏は、圉牆をとともう遺跡の規模に着目した論文のなかで、それらの性格をめぐる問題をまとめている。そして、「城址遺跡の城壁には複数の機能があり、また城址遺跡も、おそらくその規模と関係しつつ、異なる性格を有していた可能性が指摘できよう」と結論づけている(渡辺芳郎「中国新石器時代晩期の城址遺跡に関するノート」『鹿大史学』第43号、1996、参照)。

このように、城牆のもつ意味に関しては、地域、立地、形態などによって様々な可能性が考えられるとするのが昨今の趨勢のようである。

ひとつ例証をあげてみたい。先刻承知のように、圉牆や環濠は戦争の際に敵からの襲撃を防ぐための施設(防御施設)であったとするのが従来の通説であった。しかし、実際、城牆や環濠を有する竜山期の王城崗遺跡(河南省登封)や二里頭期の東下馮遺跡(山西省夏県)には、たとえば、①有刃器(鏃・矛・戈)の産出量最大期と城牆の存続時期が一致しない(王城崗)、②城牆を取り巻く圉壕内に住居や貯蔵庫が存在する(東下馮)、といったように、城牆や環濠の築造目的を防御としたときに不都合となる事象が見受けられる。前者の場合、外敵からの防御を第一に考えて城牆がつくられたならば、城牆存続期にこそ(武器と解釈可能な)有刃器の出土量がピークを形成するはずであろうし、また後者の場合も、外敵の攻撃にさらされる圉壕内にヒトが住み、モノが貯えられる必然性がみいだせない(この件に関しては、拙稿「城牆築造の意味を探る」93年度史学大会部会発表要旨『上智史学』第39号、1994、参照)。この事実関係は、圉牆や環濠の意味がひとつに限定されないことを裏付けており、また、考古学の立場から意味論を展開することの難しさを物語る事例ともなっている。

(8)参考として、環濠集落の存在に着目し、日本の弥生時代を、区画、隔絶、区別、差別、分割といった性格を指向する社会としてとらえた論考があることを指摘しておきたい(水野正好『島国の現像』日本文明

- 史、第二巻、角川書店、1990、参照)。この論考は、観念レベルにおいて、環濠にそなわる共通意識を模索した好例といえるだろう。
- (9)しかしさらにすすんで、何故区画をするのかと問われると、「もの」を原点とする考古学の立場では踏み込むことが難しくなってくる。様々な考えは浮かんでこようが、いずれも状況証拠からの推論とならざるをえず決定力に欠ける。考古学的手法の限界といえるかもしれない。
- (10)人間の精神世界への理解を基盤に、遮蔽物による区画の思想をさらに展開させていく道が存在する。たとえば、内と外の観念といった類のものである(内と外の観念に関しては、赤坂憲雄『異人論序説』筑摩書房、1992、などを参照)。あるいは、廣松渉氏が、囲牆も含めた古代の巨大事業が、観念的に構築された表象的環境世界への応接と密接な結びつきを有することを述べている如きである(廣松渉『生態史観と唯物史観』講談社学術文庫、1991、参照)。しかしこれは考古学の道から踏みはずれるものであり、本論で言及することはしない。
- (11)渡辺芳郎氏も「社会システム・ネットワーク」、すなわち本稿でいう連関の視点についてふれている(註7、渡辺芳郎論文、参照)。
- (12)聊城地区の囲牆群に関しては、以下の3点の簡報により概略を知ることができる。山東省考古所、聊城地区文研室「魯西発現兩組八座竜山文化城址」『中国文物報』1995年1月22日(第4期)。張学海「魯西兩組竜山文化城址的発現」『中国文物報』1995年6月4日(第22期)。王守功「景陽崗竜山城址考古有重要発現」『中国文物報』1996年1月7日(第1期)。また、張学海「魯西兩組竜山文化城址的発現及对幾個古史問題的思考」『華夏考古』1995-4、張学海「試論山東地区的竜山文化城」『文物』1996-12、においても聊城地区の囲牆群が紹介されている。
- (13)聊城地区囲牆群に属する遺跡の名称はまだ一定していない。たとえば、王莊は王家莊、樂平鋪は三十里鋪、孟嘗君は遲橋と別称されるごとくである(註12、張学海1995年論文、などを参照)。
- (14)景陽崗の城牆については以下の試掘報告が公表されている。山東省文物考古研究所、聊城地区文化局文物研究室「山東陽谷県景陽崗竜山文化城址調査与試掘」『考古』1997-5。
- (15)註14、山東省文物考古研究所他報告、参照。なお、註12、張学海1995年報告では、「竜山文化(中晩期)の城垣の上に岳石文化と東周の城垣が重なる」といった記述がうかがえる。景陽崗の囲牆は竜山期以降の時代になっても使われていた可能性が強い。
- (16)先述した、囲牆の存在が推定される東阿孟嘗君と茌平台子高は、それぞれが、教場鋪と尚莊の近隣に位置している(前者は教場鋪の西南2.5km、後者は教場鋪の東北21kmのところ)。したがって、それらを加えると、北組中、南側のグループには五城、北側のグループには二城が存在したことになる。
- (17)城子崖に関する主要報告は以下の通りである。李济(総編輯)『城子崖』中国考古報告集之一、1934。山東省考古研究所「城子崖遺址又有重大発現 竜山岳石周代城址重見天日」『中国文物報』1990年7月26日(第29期)。張学海「章丘県城子崖古城址」『中国考古学年鑑1991』文物出版社、1992。張学海「泰沂山北側の竜山文化城」『中国文物報』1993年5月23日(第20期)。佟佩華「章丘県城子崖遺址」『中国考古学年鑑1992』文物出版社、1994。なお、当遺跡は、李济報告において歴城県に属するとされていたが、現在は章丘市に帰属する。
- (18)1990年の試掘に関しては、註17、山東省考古研究所報告、同、張学海1992年報告、91年の試掘に関しては、同、佟佩華報告に簡報が掲載されている。
- (19)かつて安志敏氏は、城子崖の夯土牆は東周時期の建築であり、竜山文化とは無関係であるとする考えを公表した(安志敏「中国新石器時代の物質文化」『文物参考資料』1956-8、参照)。また、大島利一、樋口隆康の両氏も、城牆を新石器時代のものとすることに否定的であった(大島利一「中国古代の城について」『東方学報』第30冊、1959、樋口隆康『北京原人から銅器まで』沈黙の世界史9、新潮社、1969、参照)。筆者はこれらを受けて、報告書掲載の断面図(註17、李济報告、30頁、挿図4)をもとに、当囲牆が新石器時代に構築されていたことを、築造法を考慮に入れつつ論証したことがある(拙稿「城牆の出現にかかわ

る問題』『上智史学』第31号、1986、参照)。今日では、(本文でも述べているように) 岳石文化のものであったことが発掘により証明されている。

(20) 註17、山東省考古研究所報告、参照。

(21) 新報告(註17、山東省考古研究所報告、同、張学海1992年報告、参照)では、岳石文化の時期の囲牆の計測値があきらかにされていない。旧報告(註16、李濟報告、参照)の計測値(南北450m、東西390m、すなわち岳石期の囲牆の大きさ)を単純にかけあわせると17万5500m<sup>2</sup>となり、これは17万m<sup>2</sup>という新報告の城内面積とはほぼ合致する。岳石期の囲牆は一部竜山期の囲牆を利用しながらも面積が少し狭くなっていたのであろう。

(22) これは、旧報告(註17、李濟報告、参照)でいわれる譚国の時代に該当するものである。

(23) 丁公遺跡に関しては、以下の報告を参照のこと。山東大学歴史系考古專業、鄒平県文化局「山東鄒平丁公遺址試掘簡報」『考古』1989-5。同「山東鄒平県古文化遺址調査」『考古』1989-6。山東大学歴史系考古專業「山東鄒平丁公遺址第二、三次発掘簡報」『考古』1992-6。註17、張学海1993年報告。山東大学歴史系考古專業「山東鄒平丁公遺址第四、五次発掘簡報」『考古』1993-4。樊豊実「鄒平県丁公新石器時代至漢代遺址」『中国考古学年鑑1992』文物出版社、1994。樊豊実「鄒平県丁公新石器時代至漢代遺址」『中国考古学年鑑1993』文物出版社、1995。

(24) 丁公の囲牆については、註17、張学海1993年報告、註23、山東大学歴史系考古專業1993年報告、同、樊豊実1994、95年報告、などを参照。

(25) 註17、張学海1993年報告。魏成敏「臨淄市田旺竜山文化城址」『中国考古学年鑑1993』文物出版社、1995。

(26) 光明、竜国、連利、志光「桓台史家遺址発掘獲重大成果」『中国文物報』1997年5月18日(第20期)。

(27) 張学海「寿光県辺線王竜山文化城堡遺址」『中国考古学年鑑1985』文物出版社、1985。佟佩華「寿光県辺線王竜山文化城堡遺址」『中国考古学年鑑1987』文物出版社、1988。寿光県博物館「寿光県古遺址調査報告」『海岱考古』第1輯、1989。註17、張学海1993年報告。

(28) 註27、張学海1985年報告、参照。

(29) 山東省文物考古研究所「薛故城勘探試掘獲重大成果」『中国文物報』1994年6月26日(第25期)。

(30) 筆者は、山東で出土する素面鬲に対する考察のなかで、東西に展開するベルト様の囲牆分布状況が素面鬲の分布と重なることを指摘した。そしてその事実、山東で囲牆が築かれたときの社会情勢を読み解くひとつの糸口が隠されているのではないかと暗示したことがある(拙稿「山東竜山文化の素面鬲」『古代文化』第49号、第4号、1998、参照)。

(31) 本稿は、聊城地区の囲牆群が同時に併存した時期を有していたことを前提としている。囲牆群が竜山期に属していたことはあきらかであるが、現段階では竜山期のどの段階に使用されていたのか、そこまでの情報は得られていない。あるいは、存続時期にずれのある例が含まれているかもしれない。

(32) 聊城地区の遺跡群に関しては、趙乃光、郭争鳴「山東聊城地区新石器時代遺址調査」『考古学集刊』7、1991、を参照した。

## 図表出典

表 1

1. 『中国文物報』1995年1月22日(第4期)、山東省考古所他報告。
2. 『中国文物報』1995年6月4日(第22期)、張学海報告。
3. 『中国文物報』1996年1月7日(第1期)、王守功報告。
4. 『華夏考古』1995-4、張学海論文。
5. 『文物』1996-12、張学海論文。

6. 『考古』1997-5、聊城地区文化局文物研究室報告。
7. 李济（総編輯）『城子崖』中国考古報告集之一、1934。
8. 『中国文物報』1990年7月26日（第29期）、山東省考古研究所報告。
9. 『中国考古学年鑑1991』所収、張学海報告。
10. 『中国考古学年鑑1992』所収、佟佩華報告。
11. 『中国文物報』1993年5月23日（第20期）、張学海報告。
12. 『考古』1993-4、山東大学歴史系考古專業報告。
13. 『中国考古学年鑑1992』所収、欒豊実報告。
14. 『中国考古学年鑑1993』所収、欒豊実報告。
15. 『中国考古学年鑑1993』所収、魏成敏報告。
16. 『中国文物報』1997年5月18日（第20期）、光明他報告。
17. 『中国考古学年鑑1985』所収、張学海報告。
18. 『中国考古学年鑑1987』所収、佟佩華報告。
19. 『中国文物報』1994年6月26日、第25期、山東省文物考古研究所報告。
20. 『考古』1997-4、中美兩城地区聯合考古隊報告。

図1 『考古』1997-5、12頁、図2。

図2 『考古学集刊』7、1991、2頁、図1、をもとに筆者が作成。